

特集 さまざまな課題に対応するために

授業の中に時間を作るには —明確な目的を持った「断捨利」をしよう

和田 朋子 (工学院大学)



活動が豊富な新しい NEW CROWN

28NC には、生徒に「英語を使う」という実感を持たせるための活動がたくさん含まれています。まず GET で、そのレッスンのターゲットとなる文法事項を理解し、基礎・基本を習得します。次に USE Read の文脈の中でそれらが使われている文章を読むことはもちろん、USE Speak や USE Write で文法事項を活用した発信活動を行います。さらには、Let's Listen や Let's Talk で実際の生活により近い場面を使って練習したり、Project で4技能を統合的に使った発信活動をしたりと、生徒に英語を使わせるための活動がたくさん用意されています(詳しくは教科書冒頭の「この教科書の使い方」を参照)。

言語材料の定着のためには、このような活動なるべくたくさん生徒にやらせたいと思う一方で、授業の時間には限りがあります。教師の悩みとしては、「授業の中で生徒に活動をやらせる時間をどのように作っていくのか」といったところでしょうか。

キーワードは「断捨利」

授業の中で時間を作るためのキーワードは「断捨利」です。最近、よく聞かれる「断捨離」とは少し違いますので注意してください。ここで提案する「断捨利」とは、

断 レッソンの流れを判断する
捨 流れに乗らないものはある程度捨てる
利 教科書を家庭学習の中で利用させる

を意味します。この「断捨利」を実際の授業でどのように考えればよいか、28NC Book 2 Lesson 3 ~ For Self-study を具体例として説明していきます。

「断」 レッソンの流れを判断する

「断」では、まず、どのような流れで授業を行っていくのかを「判断」します。この「判断」することが、あとの「捨てる」ものや「利用する」ものを決める指針になるからです。

では、ここで何を判断すべきなのかというと、まずはどのような流れで授業を進めるかを考えるということです。例えば、Lesson 3 GET Part 1 は、教科書のページ順に進めると、まず p.24 のポスターを扱うことになります。しかし、ポスターでは6行目になるまで、ここでのターゲット文法である「未来を表す表現 (will)」が出てきません。もしこれを、本文1行目から入り、教えたいポイントにたどり着くまでに多くのことを説明してしまえば、「will」がどのような時に使われるのか、イメージが作りにくくなってしまいます。つまり、ここで教師が下すことのできる「判断」は、例えば、「“will” の導入は p.25 の Practice から入ってみよう」と決めることです。p.25 の Practice は天気予報がテーマになっているので、「will」の持つイメージを直接的に生徒に伝えることができます。実際の授業では、まず p.25 の Practice, 1 Listen を行ってイメージをつかみ、p.24 の POINT を使って“will”についての説明をしたあと、もう一度 p.25 に戻り、Practice, 2 Speak と3 Write で“will”を使うことに慣れさせるという流れが考えられます。もう少し練習が必要だと感じれば、p.24 の Drill を繰り返し行ってもよいですし、練習が十分だと感じたら、p.24 のポスターを読んで Part 1 のまとめへと入ってもよいでしょう。授業の流れをスムーズにすることで、生徒が英語を使う時間をたくさん作ることができるようになります。

「捨」 流れに乗らないものはある程度捨てる

限られた授業時間の中で、なるべくたくさんの言語活動を行うためには、「授業の流れに乗らないものはある程度捨てる」ということが必要になります。つまり、授業の進め方を「判断」し、余分な説明を「捨てる」ことで、USE Read においても、授業の時間を有効に活用できるようになります。

USE Read の文章は言わば「対外試合」の場であり、GET で学んだ言語材料を使って、生徒自身がどれだけ実際の言語使用場面に近い文章を読めるのかを試す場です。このときに大事なものは、「読めた」という実感を生徒に持たせることです。そのためには、文章の一語一句を手当てするために授業の時間を使うのではなく、Tips for Reading, Notes, Check を利用することで、余分な解説や説明を「捨てる」、生徒自身が自立的に文章を読むステップを踏ませることが、本来の時間の使い方とも言えるでしょう。

Lesson 3 USE Read は、本文とリーディングタスクの他に、Words, Tips for Reading, Notes, Check, Think などがあり、教師が授業で扱うべき部分が多いように見られます。一方で、生徒自身に本文を自立的に読ませることも考えなくてはなりません。このようなときは、授業で初めて本文を読ませるのではなく、最初の読解を家庭学習として課するという「判断」をしてはどうでしょう。もちろん、ただ「読んでください」では生徒も戸惑うので、事前に、Notes や地図を使いながら小笠原諸島についての背景知識の導入を行っておきます。重要な新語について触れておいてもよいでしょう。また、読むためのヒントである Tips for Reading を参考にした簡単な問いを1つ出しておくと、目的を持って読ませることができます。そうすれば、次の授業は1st Reading の答えを確認するところからスタートでき、各段落のキーセンテンスのみを取り上げながらおおまかな概要を理解させることで、本文の全体像をつかませることができます。つまり、生徒に初めて英文を読ませるというステップを、授業の中で行わず「捨てる」という判断をすることになります。

Check についても、わざわざそれだけを取り出して答え合わせするのではなく、本文理解の助けと

して利用します。例えば、2nd Reading の2. (1) を見てみると、ここでは p.30 の4~7行目の“they”を主語とする文が正解です。一方、Check では、4行目の“they”が表すものを確認する問いが設定されています。これを利用しながら2nd Reading 2. (1) の答えを引き出すことができます。

このように、予め Tips for Reading, 1st ~ 3rd Reading, Check などの内容を把握し、これらを組み合わせて「判断」すれば、本文を端から一語一句手当てすることは「捨てる」でも、生徒の自立的な読解を促しながら、十分に本文理解を行えることがわかります。生徒にとっても、家庭学習で行ったことが授業での理解を助け、自立的に本文が読めていることを実感することにつながると考えます。

「利」 教科書を家庭学習のなかで利用させる

家庭学習で教科書を「利用」することが授業を効率的に進めることにつながる場合もあります。先に示したように、28NC では本文の背景知識を補充するための情報を掲載した Notes や、読んだり、書いたり、話したりするときのヒントを示した Tips for Reading/Writing/Speaking/Communication などがページ内に散りばめられています。また、Lesson ごとの「文法のまとめ」や、学年や学期をまとめて文法事項をまとめた Review、英語学習のヒントを示した For Self-study など、多くの特集ページが設定されています。授業中にこれらのページを使って生徒の思考を整理したりすることもできますが、家庭学習に「利用」するよう仕掛けることで、生徒を自律(立)的な学習者に育てることもつながっていきます。例えば、Lesson 3 では“will”と“be going to ~”が扱われていますので、授業のまとめとして“will”と“be going to ~”のどちらを使うのかを判断させるようなプリントを作っておけば、p.34 の「文法のまとめ」を見ながらそれに取り組む、という宿題を出すことができるでしょう。

おわりに

豊富な活動を授業にたくさん取り入れるためにも、明確な目的を持った「断捨利」を行い、時間を有効に使った授業計画を立てるようにしましょう。